

温泉地におけるエコミュージアムの考え方

— 上山田温泉資料館の試み —

The Concept of Ecomuseum in Hot Spring Resorts

— An Attempt of the Onsen History Museum in Kamiyamada —

深見 聡* 井出 明** 滝澤 公男***

FUKAMI, Satoshi IDE, Akira TAKIZAWA, Kimio

エコミュージアムは、地元住民と観光客をつなぐ仕組みづくりとなる可能性を有している。本研究では、エコミュージアムのコア施設として、温泉地の博物館(上山田温泉資料館)を取り上げる。元来、株式会社の社史編纂事業として始まった本資料館は、近年、地域との連携が深まりつつある。このような“つながり”は、地域資源とよばれる歴史や文化の蓄積を住民と観光客がともに知ることになり、観光客のリピーター化が促される可能性を示唆している。この種の事例に注目することで、温泉地の抱える地域特性に立脚した振興策、とくに観光を柱にする際のモデル提起が可能となる。

キーワード：エコミュージアム、温泉地、地域振興、上山田温泉資料館

1. はじめに

温泉を活かした観光振興が注目を集めている。とりわけ近年の観光形態は、通過型から滞在型へ、マス・ツーリズムからスモール・ツーリズムへと転換が図られ、とくに温泉地は旅館や温泉そのものへの需要のほか、その土地に固有の地域資源(文化遺産・自然景観・体験等)を活用したり、泉質がもたらす効能を若い世代にも発信するなど、生き残りをかけた模索を続ける動きとして表出しつつある¹⁾。

そのような転換を図る仕組みづくりにおいて、地域の連携体制の構築は欠かせない。そこで注目されるようになったのがエコミュージアムの考え方である。この概念を導入することで、大規模な投資を必要とせず、今あるヒトやモノを機能的にとらえた振興策が確立していくことが期待されるのである。

そこで、本論文では、長野県の戸倉上山田温泉にある上山田温泉資料館の活動を取り上げ、それをとおして、温泉地でのエコミュージアムの考え方を整理し、その可能性について考察してみたい。本稿では、はじめに、エコミュージアムと温泉地との関わりについて概観する。その後、上山田温泉と資料館がもつ特徴を整理する。その上で、対象地をエコミュージアムの仕組みとしてとらえた場合の可能性について検討を加え

ることとする。

2. エコミュージアムとは何か

エコミュージアムは、1970年前後にフランスの博物館学者、G.H. リビエールによってはじめて定義がなされた。もとは、エコロジー(Ecology)とミュージアムの造語である。ここで意味するエコロジーは、自然環境と人間環境との関わりを強く意識しており、ヨーロッパを中心に世界各国で定義の進化・発展がみられる。

日本において、「生活・環境博物館」という訳語で紹介されたのは1980年代のことである。バブル経済崩壊の後、エコミュージアムの存在は、日本で急速に注目を集めるようになった。現地にある文化財や自然景観、人びとの記憶など地域の姿を「まるごと博物館」ととらえて、地域住民がみずからそれらを再発見し、来訪者のガイド役をおこなう主体性の存在が大きな特徴である。また、既存の博物館等をコア施設、一定のテリトリーに点在する地域資源をサテライトと位置づけることで、地域の特性を活かす仕組みづくりの構築が促される利点も有する²⁾。

とくに、最近では生涯学習社会の到来とも重なり、地域を知る役割への期待が高まっている。それは来訪者となる観光客にとっても、本物志向やスモール・ツ

リズムへの転換といったニーズに応えるものといえる。よって、エコミュージアムはヒトやモノの動的な関係性により成立することから、近年では、その名を付けるか否かよりも、むしろ仕組みづくりという本質的な側面に注目しようとする考えもみられるようになった²⁾。

3. 温泉地におけるエコミュージアム

エコミュージアムは、その名称を名乗るか名乗らないかの違いはあるものの、前章で述べたように仕組みづくりの工夫が求められる。その際、温泉地は、地域に特有の資源として位置づけやすく、また、温泉への観光客のニーズの高まりという背景からエコミュージアムを展開する上で優位的な素地をもっている。

たとえば、北海道の川湯エコミュージアムは、川湯エコミュージアムセンターをコア施設とし、カルデラ湖である屈斜路湖一帯をテリトリーとしている。また、NPO法人桜島ミュージアムはその名のとおり桜島をまるごと博物館ととらえ、桜島国際火山砂防センターや桜島ビジターセンターをコア施設とし、島内に点在する温泉を1つのサテライトととらえて活動している。別府温泉では、浜田温泉館をコア施設、別府八湯温泉博覧会(通称ハットウ・オンパク)など多様なまち歩きイベントで地域資源(サテライト)の魅力を訪ねる活動が定着してきた。

ここで紹介した事例はごくわずかに過ぎないが、共通して見出せるのは、「温泉」そのものへの観光ニーズの高まりと、エコミュージアムという仕組みへの関心の高まりをいかに結びつけられるかという点である。すなわち、温泉地がもつ滞在型・保養型といった側面にどのような回遊性を付加し、地域ごとに個別化が可能かという課題こそが、エコミュージアムの仕組みづくりと地域の活性化に直結していると考えられる。

4. 上山田温泉資料館の試み

本章では、上山田温泉資料館の先駆的な取り組みについて報告する。

(1) 戸倉上山田温泉の地域特性

戸倉上山田温泉は、近隣の別所温泉など他の温泉地とは歴史的特性を異にしている³⁾。別所温泉は、江戸時代にすでに自然湧出していたため、温泉地としての歴史が長い。一方、戸倉上山田温泉は、明治期に入ってから掘削で誕生しており、その歴史は比較的短い。

戸倉上山田地域では、元来、千曲川の洪水の時期に「温かいお湯がわき出る」という現象が古より知られていたが、この経験則から明治期に入って掘削がおこなわれたのである。したがって、本資料館が所蔵・研究の対象としている時期は、基本的に近代以降となるが、これは温泉地として長い歴史を有している白浜や有馬の博物館とは大きなコントラストを見せている。しかし、「長い歴史」を誇る温泉地が多いなか、戸倉上山田温泉についての研究を概観することは、温泉を通じて日本の近現代史を学ぶことになるため、本資料館の独自の存在意義は大きいと言えよう。

(2) 上山田温泉資料館のミッション

前述の通り、戸倉上山田温泉の歴史を「近現代史の凝縮」と考えた場合、当資料館には独自のミッションが肯定される。

戸倉上山田温泉は、明治期の共同浴場時代を経て、大正期から歓楽街として発展していった。そして、戦後の高度成長期の波に乗り、最盛期には120軒を超える旅館数と年間130万人ほどの観光客が訪れた。ただし、歓楽街としての成功は、のちに街に影をもたらすことにもなる。

以下は、戸倉上山田温泉に限った話ではないが、1956(昭和31)年に制定された売春防止法は、近隣の遊郭から温泉地に性風俗産業を呼び寄せることになる。高度成長期の観光産業が、「酒と女」というキータームで表され、「旅の恥はかきすて」という風潮を生み出したのは、往年の温泉旅行が持つ負の側面を起源としていることは否定できない。このようなコンテクストを鑑みれば、近年の団体旅行の減少に際し、あえて一人旅で温泉地を訪れようとする観光行動が多くは見られないことも得心がいく。同時に、旧来の温泉観光地の中には、一見の客から不相当な対価を受け取ろうとする旅館業・飲食業者も存在するが、それらが発生する根本的な理由として、地域の光を見せてリピーターを獲得する意欲に乏しいことが挙げられるのではないかと考えられる。旅先での不幸な体験は、訪問した地域に対する悪感情を生み出し、リピーターの獲得どころか、口コミを通じた新規顧客の開拓にも影響を及ぼす。さらに、歓楽街の温泉地で育った若い世代には、その複雑な社会的背景故に、自己のふるさとに対する愛着を持って地域を去り、温泉地の過疎化が進んでしまうという現象も見受けられる。

しかし、このような状況をすべての温泉地における

総体であると考えすることは誤っている。

ここで取り上げている戸倉上山田温泉は、もともと地元住民からの拠出金で掘削された経緯を持ち、地域の人びとの熱い願いによって誕生している。また、温泉歓楽街の歴史を概観すれば、さまざまな過去を持つ人たちが、温泉地で地元の住民とともに働き、そこに都市でも農村でもない特殊なコミュニティが形成されたことも事実である。三味線や各種の話芸、そしてテキ屋が開く射的などの出店、さらには大衆演劇やストリップに至るまで、戦後のサブカルチャーの一端を温泉文化が担ったことも確かである。このように考えれば、温泉地の様相が決して単純なものではなく、重層的で多面的な色彩を帯びていると言ってよい。

然るにこれまで、温泉街が地元の成り立ちや発展の経緯を、地域研究の観点から体系的に研究・展示している施設はほとんど無かった。いきおい、地元で育つ子ども達が、地域に対して正しい理解をすることもなく、また地元住民が地域に対して愛情を持つという意識も希薄であった。

本資料館は、もちろん工学・理学をはじめとした自然科学の見地から上山田温泉の特徴や意義を検討しているが、同時にここまで述べた「社会現象としての温泉」についての研究・展示にも力を入れている。「社会現象としての温泉」について、歴史的経緯や社会的内実を子ども達に伝え、正しい理解にもとづいて地域に対する愛情と誇りを持てるようにすることが本資料館の基本的ミッションである。同時に、そこに住み、そこで働く人たちが、やはり地域に愛情と誇りを持つための「場」として本資料館は機能しつつあるが、この点については後に述べたい。また、観光客が戸倉上山田温泉について理解を深め、単なる観光客から地域のサポーターへと転換するための装置としても役割を果たしつつある。

博物館の本来の機能としての、資料の収集・保存も重要な任務であり、これまで地元住民が重要だと思っていなかった各種パンフレットや掘削に関する機械の保存にも力を入れている。従来、各地の温泉地でさまざまな資料が散逸してしまっている現状を見るにつけ、地域の博物館が地域の資料を保存する重要性が再認識されつつあることの証といえる。

(3) 上山田温泉資料館の特徴

本温泉資料館は、上山田温泉株式会社が百周年を期に社史を編纂することとなり、その執筆を滝澤が受け

たことに端を発する。会社の資料室や倉庫を調査してみると、希少価値のある物品が多く発見された。たとえば、展示物として目を引く掘削機は、昭和前期に新潟鉄工（株）が販売していたものを、上山田温泉株式会社戦後に購入して使用していたものであるが、この掘削機が現役を退いた後、鉄需要が高まった時期にも手放さずに保存していた。同社にはこのような貴重な物品が多く眠っていたため、本格的な資料館設立の構想が生まれたのである。

日本国内には、いくつかの温泉に関連する博物館が存在するが、当該資料館は興味深い特徴を有している。

第一に挙げられる点として、本資料館が私設であることが特筆される。また、年間開館日数などの制約から、博物館法における博物館の定義はもとより、博物館相当施設にも該当せず、あくまでも「私設の資料館」というスタンスを貫いている。すなわち、公によってオーソライズされていないため、公的助成が受けられないなどのデメリットはあるものの、補ってあまりあるメリットも存する。具体的には、公設でないが故に、展示にしがらみが無く、自由に構成できるという点が大きい。公設の博物館の場合、地域の負の側面については、展示内容について関係各所と詰めなくてはならないが、私設であるがゆえに、社会的・学術的に価値のある資料は、比較的自由に展示することが可能である。これは、観光政策上も非常に有効に働いており、公設であれば民間業者と緊密な連携が難しくなるが、私設であるが故に、各種旅行代理店などと連携したツアーが組みやすくなっている。同時に、私設であるため、来館者増加要求などの外的圧力に屈する必要もなく、設置者と研究者の信念に立脚して運営を続けることが可能となっている。

第二に挙げられる点として、本資料館は文理融合型の展示・研究を心がけており、資料も自然科学だけでなく、人文・社会科学に関する展示も多いことである。

第三の特徴として、運営面に言及しておきたい。運営は、視察の要請があった時に館長が開けるというボランティアベースとなっている。館長の滝澤は、長野県立歴史館での専門員・資料調査員の経験が長くあり、資料研究のノウハウがある。それゆえ、専任学芸員がいない他地域の温泉博物館よりも研究活動が順調に進んでいると言えるのではないだろうか。

(4) エコミュージアムとしての現状

エコミュージアムとして温泉地の博物館を考える場

合、重要なのは地域との連携である。元来、株式会社の社史編纂事業として始まった本資料館であるが、ここに来て急速に地域連携が深まりつつある。

地元中学における「総合的な学習の時間」での活用も増え、本資料館が目的としている次世代を担う若い人たちに、地域の多面的な歴史を学び、誇りを持たせるという使命は、少しずつではあるが達成されつつある。さらに、戸倉上山田温泉の温泉旅館の女将で構成される「女将の会」からも見学の申し入れがあり、およそ百年の歴史を持つこの地域について、初めて体系的に学んだと言う話も多く聞かれた。

さらに、千曲市の観光課や地元観光協会からのアプローチもあり、行政との連携も進みつつある。

これらは、一私企業がはじめた活動が、着実に地域住民の意識の変化を生み出している動きと言えよう。

(5) 今後の展望

昭和時代に団体旅行に大きく依存していた温泉街は、近年どこもその傾向を改め、脱皮を図ろうとしている。ここで紹介した温泉資料館は、温泉地における個人客誘因の装置としての力も有している。観光の本質的意義は、自己啓発と相互交流にある⁴⁾。とくに近年の個人客は、観光行動に自己啓発や文化的発見を求める傾向にあり、これまで歓楽街として認知されていた戸倉上山田に、歴史と文化の蓄積があることを知れば、観光客はリピーターに変化し、この地の魅力をより知ろうと意識を傾ける可能性がある。もてなす側も、地域に対する知識を深め、誇りを持っているならば、個人観光客との交流の仕方もこれまでとは変化してくるであろう。このような形での地域振興は、広義の持続可能な地域開発であり、日本の高度成長期における「客は旅の恥はかきすて、店はここぞとばかりに不当請求をする“略奪型観光”」からはかなり進化した観光形態となる。地域の魅力を研究し、それを内外に発信するためのハードとソフトの仕組みが合ってこそ、このサステナビリティは維持される。

来訪者対応は、資料館の重要な任務であるが、現在、本資料館では、外部対応を館長1人で担っているため、マンパワーの面で限界がある。今後は、観光客が地域を知るためのゲートウェイとしての資料館の価値を地域で共有し、ツアーガイドについては地元の人材を育成していきたいと考えている。

人材育成と関連して、地元の小中学校との連携はより重要になる。理科教育の面からは、温泉は火山活動

を学ぶ端緒になり、戸倉上山田の子ども達が地域から地球へと視野を広げるきっかけになることを願っている。同時に、中学校社会科や高校の地理歴史科・公民科において、地域をマルチ・スケールにとらえたり、社会制度を多面的に考察するための学習(訓練)の場として本資料館を活用する可能性を探っている。

5. おわりに

温泉地におけるエコミュージアムの考え方は、われわれに多くの示唆を与えてくれる。日本が、本格的に観光立国へと舵を切った今日、人口減少社会や地域の財政基盤の硬直化といった課題に対して、地域振興のあり方も大きな転換を否応なく図らなければならない。

本論文では、上山田温泉資料館の事例をとおして、行き詰まりを見せているいくつかの温泉地に対して、新たな観光のあり方のヒントを提示できたと考えている。庶民文化の重層的存在としての温泉を、社会的にどのように位置づけていくのかという体系的な学問は、未だに確立しているとは言えない。従来の自然科学中心の温泉研究に加えて、人文・社会科学からのアプローチも踏まえた学際的研究を発展させていく必要がある。

付記:本論文をまとめるにあたり、2008年度長崎大学高度化推進経費「新任教員の教育研究推進支援経費」の一部を使用した。

【補注】

(1)エコミュージアムの議論では、行政と地元住民の連携がどちらに主導型があるのかが重要視される面があった。その実利はいずれも住民に還元されるべきものであるので、筆者はきっかけづくりの役割は両者にあると考えている。

【参考文献】

- 1) 深見聡(2008):「旧中心市街地におけるエコミュージアムづくりの試み」、地域総合研究、34(2)、pp. 53-70.
- 2) 深見聡(2007):『地域コミュニティ再生とエコミュージアム—協働社会のまちづくり論』、青山社、182p.
- 3) 滝澤公男(2008):「戸倉温泉・上山田温泉場成立過程」、千曲、138、pp. 41-45.
- 4) ジョン=アーリ著・加太宏邦訳(1995):『観光のまなざし』、法政大学出版会、pp. 12-24.